

一夕話

芥川龍之介

青空文庫

「何しろこの頃は油断がならない。和田さえ芸者を知っているんだから。」

藤井と云う弁護士は、老酒の盃を干してから、大仰に一同の顔を見まわした。円

卓のまわりを囲んでいるのは同じ学校の寄宿舎にいた、我々六人の中年者である。

場所は日比谷の陶陶亭の二階、時は六月のある雨の夜、——勿論藤井のこういったのは、もうそろそろ我々の顔にも、酔色の見え出した時分である。

「僕はそいつを見せつけられた時には、実際今昔の感に堪えなかつたね。——」
藤井は面白そうに弁じ続けた。

「医科の和田といった日には、柔道の選手で、賄征伐の大将で、リヴィングストンの崇拜家で、寒中一重物で通した男で、——一言にいえば豪傑だつたじゃないか？ それが君、芸者を知っているんだ。しかも柳橋の小えんという、——」

「君はこの頃河岸を変えたのかい？」

突然横槍を入れたのは、飯沼という銀行の支店長だつた。

「河岸を変えた？ なぜ？」

「君がつれて行った時なんだろう、和田がその芸者に遇つたというのは？」

「早まつちやいけな。誰が和田なんぞをつれて行くもんか。——」

藤井は昂然こうぜんと眉を挙げた。

「あれは先月の幾日だったかな？ 何でも月曜か火曜だったがね。久しぶりに和田と顔を合せると、浅草へ行こうというじやないか？ 浅草はあんまりぞつとしないが、親愛なる

旧友のいう事だから、僕も素直に賛成してさ。真まつ昼間六区へ出かけたんだ。——」

「すると活動写真のなかにもい合せたのか？」

今度はわたしが先くぐりをした。

「活動写真ならばまだ好いが、メリイ・ゴオ・ラウンドと来ているんだ。おまけに二人とも木馬の上へ、ちゃんと跨またがつていたんだからな。今考えても莫迦ばか莫迦ばかしい次第さ。しかしそれも僕の発議ほつぎじやない。あんまり和田が乗りたがるから、おつき合いにちよいと乗って見たんだ。——だがあいつは楽じやないぜ。野口のぐちのような胃弱は乗らないが好い。」

「子供じやあるまいし。木馬になんぞ乗るやつがあるもんか？」

野口という大学教授は、青黒い松スノホア花を頬張つたなり、蔑さげすむような笑い方をした。が、藤井は無頓着むとんじやくに、時々和田へ目をやっては、得々とくとくとくと話を続けて行った。

「和田の乗つたのは白い木馬、僕の乗つたのは赤い木馬なんだが、楽隊と一しよにまわり

出された時には、どうなる事かと思つたね。尻は躍るし、目はまわるし、振り落されな
 だけが見つけものなんだ。が、その中でも目についたのは、欄干らんかんの外の見物の間に、芸
 者らしい女が交まじつている。色の蒼白い、目の沾うるんだ、どこか妙な憂鬱な、――」

「それだけわかつていれば大丈夫だ。目がまわつたも怪しいもんだぜ。」
 飯沼はもう一度口を挟んだ。

「だからその中でもといつているじゃないか？ 髪は勿論銀杏いちょうがえ返し、なりは薄青しほい縞しまの
 セルに、何か更紗さらさの帯だつたかと思う、とにかく花柳かりゆう小説しょうせつの挿絵さしえのような、楚々そそたる
 女が立っているんだ。するとその女が、――どうしたと思う？ 僕の顔をちらりと見るな
 り、正に嫣然えんぜんと一いっし笑しょうしたんだ。おやと思つたが間に合あわない。こつちは木馬に乗つ
 ているんだから、たちまち女の前は通りすぎてしまう。誰だつたかなと思つた時には、もう
 わが赤い木馬の前へ、楽隊の連中が現れている。――」

我々は皆笑い出した。

「二度目もやはり同じ事さ。また女がにつこりする。と思うと見えなくなる。跡あとはただ前
 後左右に、木馬が跳はねたり、馬車が躍はつたり、然しからずんば喇叭らっぱがぶかぶかいたり、太鼓たいこ
 がどンドン鳴っているだけなんだ。――僕はつらつらそう思つたね。これは人生の象徴だ。

我々は皆同じように実生活の木馬に乗せられているから、時たま『幸福』にめぐり遇つても、掴つかまえない内にすれ違つてしまふ。もし『幸福』を掴まえる気ならば、一思いに木馬を飛び下りるが好よい。——」

「まさかほんとうに飛び下りはしまいな？」

からかうようにこういったのは、木村という電気会社の技師長だった。

「冗じょうだん談 いっちゃいけない。哲学は哲学、人生は人生さ。——所がそんな事を考えている内に、三度目になつたと思ひ給え。その時ふと気がついて見ると、——これには僕も驚いたね。あの女が笑顔えがおを見せていたのは、残念ながら僕にじやない。賄まかない 征せい 伐ばつの大将、リヴィングストンの崇拜家、ETC.ETC.……ドクター和田長平わだりょうへいにだつたんだ。」

「しかしまあ哲学通りに、飛び下りなかつただけ仕合せだったよ。」

無口な野口も冗談をいった。しかし藤井は相あい不かわ変らず話を続けるのに熱中していた。

「和田のやつも女の前へ来ると、きつと嬉しそうに御時宜おじぎをしている。それがまたこう及び腰に、白い木馬またがに跨またつたまま、ネクタイだけ前へぶらさげてね。——」

「嘘をつけ。」

和田もとうとう沈黙を破つた。彼はさつきから苦笑くしやうをしては、老酒ラオチユばかりひっかけ

ていたのである。

「何、嘘なんぞつくもんか。——が、その時はまだ好いんだ。いよいよメリイ・ゴオ・ラウンドを出たとなると、和田は僕も忘れたように、女とばかりしゃべっているじゃないか？ 女も先生先生といっている。埋まらない役まわりは僕一人さ。——」

「なるほど、これは珍談だな。——おい、君、こうなればもう今夜の会費は、そっくり君に持つて貰うぜ。」

飯沼は大きい魚翅の鉢へ、銀の匙を突きこみながら、隣にいる和田をふり返った。

「莫迦な。あの女は友だちの囲いものなんだ。」

和田は両肘をついたまま、ぶつきらぼうにいい放った。彼の顔は見渡した所、一座の誰よりも日に焼けている。目鼻立ちも甚だ都会じみていない。その上五分刈りに刈りこんだ頭は、ほとんど岩石のように丈夫そうである。彼は昔ある対校試合に、左の臂を挫きながら、五人までも敵を投げた事があった。——そういう往年の豪傑ぶりは、黒い背広に縞のズボンという、当世流行のなりはしていても、どこかにありありと残っている。

「飯沼！ 君の囲い者じゃないか？」

藤井は額越しに相手を見ると、にやりと酔った人の微笑を洩らした。

「そうかも知れない。」

飯沼は冷然と受け流してから、もう一度和田をふり返った。

「誰だい、その友だちというのは？」

「若槻わかつきという実業家だが、——この中でも誰か知っていはしないか？ 慶応けいおうか何か卒業してから、今じや自分の銀行へ出ている、年配も我々と同じくらいの男だ。色の白い、

優しい目をした、短い髭ひげを生やしている、——そうさな、まあ一言いちごんにいえば、風流愛すべき好男子だろう。」

「若槻わかつき峯太郎、俳号はいごうは青蓋せいがいじゃないか？」

わたしは横合いから口を挟はさんだ。その若槻という実業家とは、わたしもつい四五日前まえ、一しよに芝居を見ていたからである。

「そうだ。青蓋せいがい句集くしゅうというのを出している、——あの男が小えんの檀那だんななんだ。いや、二月ふたつきほど前まえまでは檀那だんなだったんだ。今じや全然手を切っているが、——」

「へええ、じゃあの若槻という人は、——」

「僕の中学時代の同窓なんだ。」

「これはいよいよ穩おだやかじやない。」

藤井はまた陽気な声を出した。

「君は我々が知らない間に、その中学時代の同窓なるものと、花を折り柳に攀じ、——」

「莫迦をいえ。僕があの子に会ったのは、大病院へやって来た時に、若槻にもちよいと頼まれていたから、便宜を図ってやっただけなんだ。蓄膿症か何かの手術だったが、

——

和田は老酒をぐいとやってから、妙に考え深い目つきになった。

「しかしあの女は面白いやつだ。」

「惚れたかね？」

木村は静かにひやかした。

「それはあるいは惚れたかも知れない。あるいはまたちつとも惚れなかったかも知れない。が、そんな事よりも話したいのは、あの子と若槻との関係なんだ。——」

和田はこう前置きをしてから、いつにない雄弁を振り出した。

「僕は藤井の話した通り、この間偶然小えんに遇った。所が遇って話して見ると、小えんはもう二月ほど前に、若槻と別れたというじゃないか？ なぜ別れたと訊いて見ても、返事らしい返事は何もしない。ただ寂しそうに笑いながら、もともとわたしはあの人のよう

に、風流人じやないんですというんだ。

「僕もその時は立入っても訊かず、夫なり別れてしまったんだが、つい昨日、——昨日は午過ぎは雨が降っていたろう。あの雨の最中に若槻から、飯を食いに来ないかという手紙なんだ。ちようど僕も暇だったし、早めに若槻の家へ行つて見ると、先生は気の利いた六畳の書齋に、相不変悠々と読書をしている。僕はこの通り野蛮人だから、風流の何たるかは全然知らない。しかし若槻の書齋へはいると、芸術的とか何とかいうのは、こういう暮しだろうという気がするんだ。まず床の間にはいつ行つても、古い懸物が懸っている。花も始終絶やした事はない。書物も和書の本箱のほかに、洋書の書棚も並べてある。おまけに華奢な机の側には、三味線も時々は出してあるんだ。その上そこにいる若槻自身も、どこか当世の浮世絵じみた、通人らしいなりをしている。昨日も妙な着物を着ているから、それは何だねと訊いて見ると、占城という物だと答えるじやないか？ 僕の友だち多しといえども、占城なぞという着物を着ているものは、若槻を除いては一人もあるまい。——まずあの男の暮しぶりといえ、万事こういった調子なんだ。

「僕はその日膳を前に、若槻と献酬を重ねながら、小えんとはいきさつを聞かされたんだ。小えんにはほかに男がある。それはまあ格別驚かずとも好いが、その相手は何

かと思えば、浪花節語りの下つ端なんだそう。君たちもこんな話を聞いたら、小えんの愚を晒わずにはいられないだろう。僕も実際その時には、苦笑さえ出来ないくらいだった。

「君たちは勿論知らないが、小えんは若槻に三年この方、随分尽して貰っている。若槻は小えんの母親ばかりか、妹の面倒も見てやっていた。そのまた小えん自身にも、読み書きといわず芸事といわず、何でも好きな事を仕込ませていた。小えんは踊りも名を取っている。長唄も柳橋では指折りだそう。そのほか発句も出来るというし、千蔭流とかの仮名も上手だという。それも皆若槻のおかげなんだ。そういう消息を知っている僕は、君たちさえ笑止に思う以上、呆れ返らざるを得ないじゃないか？」

「若槻は僕にこういうんだ。何、あの女と別れるくらいは、別に何とも思っていない。が、わたしは出来る限り、あの女の教育に尽して来ました。どうか何事にも理解の届いた、趣味の広い女に仕立ててやりたい、——そういう希望を持っていたのです。それだけに今度はおつきりしました。何も男を捨てるのなら、浪花節語りに限らないものを。あんなに芸事には身を入れていても、根性の卑しさは直らないかと思うと、実際苦々しい気がするのです。……………」

「若槻わかつきはまたこうもいうんだ。あの女はこの半はん年としばかり、多少ヒステリックにもなっていたのでしよう。一時はほとんど毎日のように、今日限り三味線を持たないとかいっては、子供のように泣いていました。それがまたなぜだと訊たずねて見ると、わたしはあの女を好いていない、遊芸を習わせるのもそのためだなぞと、妙な理窟をいい出すのです。そんな時はわたしは何といつても、耳にかける気色けしきさえありません。ただもうわたしは薄情だと、そればかり口惜くやしそうに繰返すのです。もつとも発作ほっささえすんでしまえば、いつも笑い話になるのですが、……………

「若槻はまたこうもいうんだ。何でも相手の浪花節語りは、始末に終えない乱暴者だそうですね。前に馴染なじみだつた鳥屋の女中に、男か何か出来た時には、その女中と立ち廻りの喧嘩をした上、大怪我おおけがをさせたというじゃありませんか？ このほかにもまだあの男には、無理心中りしんじゆうをしかけた事だの、師匠ししやうの娘と駈落かけおちをした事だの、いろいろ悪い噂うわさも聞いています。そんな男に引懸ひっかかるというのはい体いどういう量りやう見けんなのでしょう。……………

「僕は小こえんの不しだらには、呆あきれ返らざるを得ないと云つた。しかし若槻の話を書いてある内に、だんだん僕を動かして来たのは、小えんに対する同情なんだ。なるほど若槻は檀那だんなとしては、当世稀まれに見る通人かも知れない。が、あの女と別れるくらいは、何でもあ

りませんといっているじゃないか？ たといそれは辞令しれいにしても、猛烈な執しゅうじやく着ちやくはないに違ちがいない。猛烈な、——たとえばその浪花節語りは、女の薄情を憎む余り、大怪我をさせたという事だろう。僕は小えんの身になつて見れば、上品でも冷淡な若槻よりも、下品でも猛烈な浪花節語りに、打ち込むのが自然だと考えるんだ。小えんは諸芸を仕込ませるのも、若槻に愛のない証拠だといった。僕はこの言葉の中にも、ヒステリーばかりを見ようとはしない。小えんはやはり若槻との間にあいだ、ギャップのある事を知っていたんだ。

「しかし僕も小えんのために、浪花節語りと出来た事を祝福しようとは思っていない。幸福になるか不幸になるか、それはどちらともいわれないだろう。——が、もし不幸になるとすれば、呪のろわるべきものは男じゃない。小えんをそこに至らしめた、通人つうじん若槻青わかつきせい蓋いだと思う。若槻は——いや、当世の通人はいずれも個人として考えれば、愛すべき人間に相違あるまい。彼等は芭蕉ばしやうを理解している。レオ・トルストイを理解している。池けのたいがが大雅たいがを理解している。武者小路実篤むしやのこうじさねあつを理解している。カアル・マルクスを理解している。しかしそれが何になるんだ？ 彼等は猛烈な恋愛を知らない。猛烈な創造の歓喜を知らない。猛烈な道徳的情熱を知らない。猛烈な、——およそこの地球を莊嚴しやうげんにすべき、猛烈な何物も知らずにいるんだ。そこに彼等の致命傷ちめいしやうもあれば、彼等の害毒ひそくも潜ひそんでい

と思う。害毒の一つは能動的に、他人をも通人に変らせてしまう。害毒の二つは反動的に、一層他人を俗にする事だ。小えんの如きはその例じやないか？昔から喉の渴いてるものは、泥水でも飲むときまつている。小えんも若槻に囲われていなければ、浪花節語りとは出来なかつたかも知れない。

「もしまた幸福になるとすれば、——いや、あるいは若槻の代りに、浪花節語りを得た事だけでも、幸福は確に幸福だろう。さつき藤井がいったじやないか？我々は皆同じように、実生活の木馬に乗せられているから、時たま『幸福』にめぐり遇つても、掴まえない内にすれ違つてしまう。もし『幸福』を掴まえる気ならば、一思いに木馬を飛び下りるが好い。——いわば小えんも一思いに、実生活の木馬を飛び下りたんだ。この猛烈な歓喜や苦痛は、若槻如き通人の知る所じやない。僕は人生の価値を思うと、百の若槻には唾を吐いても、一の小えんを尊びたいんだ。

「君たちはそう思わないか？」

和田は酔眼を輝かせながら、声のない一座を見まわした。が、藤井はいつのまにか、円卓に首を垂らしたなり、気楽そうにぐつすり眠こんでいた。

(大正十一年六月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1999年1月10日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一夕話

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>